

## マコモの栽培特性

～省力的に栽培できるマコモは不思議な作物～

### 1. はじめに

マコモは作りやすく、他県はもとより県内においても栽培に取り組んでいる事例が散見される。

マコモは稲作と同様に水を張った水田に移植し、栽培管理が省力的であることから耕作放棄地対策として、休耕田を有効利用した栽培が考えられる。しかし、生育特性等に不明な部分が多い。

ここでは、マコモの移植期が生育、収量に及ぼす影響を調査したので紹介する。

### 2. マコモの特性

マコモはアジア原産のイネ科多年生水生植物で日本、中国、東南アジアに分布する。そのうち中国産の一部の系統は黒穂菌の寄生によって肥大茎ができ、これを「マコモタケ」といって食用とする特異な作物である。

### 3. 栽培概要

系統「千葉早生」を5月25日、6月10日、6月30日の3期に移植した。苗の採取は移植の1週間前にそれぞれ行った。移植は代かき後、栽植密度を1㎡当たり1株(条間×株間：1×1m)、1本植えとした。

施肥は水稻用緩効性肥料「セラコート R622」を窒素成分で18kg/10a施用した。雑草対策は地表面を黒マルチで被覆し、病害虫の防除は行わなかった。

### 4. 生育特性

移植後、1カ月間は生育が停滞し緩慢であったが、その後、草丈伸長、分げつが旺盛となり、移植2カ月後には草丈150cm以上、株当たり茎数は14本程度となった。収穫期の草丈は2m以

表1 マコモの移植期と生育、収量の関係

移植日 (月.日)	10月3日の生育		収穫 開始日 (月.日)	収穫 終期 (月.日)	株当たり収量		1茎重 (g)
	草丈 (cm)	茎数 (本/株)			収穫茎数 (本/株)	収量 (g/株)	
5.25	240	41.9	10.4	10.24	33.7	1954	58.0
6.10	228	35.5	10.4	10.31	24.2	1458	60.2
6.30	208	33.9	10.5	10.31	28.8	1589	55.2

注) 収穫は葉鞘の抱合部がゆるみ白いマコモタケがわずかにみえた時期とした。  
1茎重は収穫後、葉鞘を除き調整したマコモタケの重さ(表紙の左上図)。



図1 収穫期のマコモ

上、茎数は株当たり40本程度に成長した(表1)。

### 5. 収量性

収穫は葉鞘の抱合部がゆるみ白いマコモタケがわずかにみえた時期とした(図1)。収穫開始日は、移植期の早晚による差が小さく、1日遅れる程度であった。5月25日移植では収穫が10月4日から始まり、10月24日まで続いた。株当たり収穫茎数は33本、収量は1.9kg程度で他の移植期より多収となった(表1)。また、5月25日移植では収穫開始から7日間で、全収穫本数の60%程度を収穫した。1茎重(収穫後調整したマコモタケ、表紙左上図)は60g以上のものが多く、収穫後期は1茎重30g以下となった。

### 6. おわりに

マコモは草丈が2mを超す大型のイネ科植物で、収穫期は10月、収量は株当たり30本程度、1本当たりの茎重が60g程度である。

省力的に栽培できることに加え、直売所等での販売により収益も期待できることから、今後、県内への作付けを図りたいと考えている。

(栽培部 川村和史)